

文法の理念と方法

Logic and Method of Grammar

高 橋 君 平

- (1) 文法とは何か
- (2) 主語と述語一句 sentence
- (3) 句の構成成分—主要語と付加語
- (4) 主要成分と基本構造
- (5) 基本構造→単句 9 型
- (6) 複句—6 型
- (7) 無主句と背景
- (8) 自然言語と付加成分
- (9) 付加成分—8 種
- (10) 主格助詞 むすび

1 文法とは何か

文法を論ずる者にとって最初にして最大の難問は、文法とは何ぞや、何を文法というのか、ということである。

そもそも文法とは何かを究明することなくしては文法は論じ得ないものと思われるのに、従来この問題を明快具体的に定義した文法書がないようである。

僕らはこう考える。

言語は意思を表現するものだが、文法とは言語の意味を表現するための規則 rules である。

言語は地球のはてに住む未開蒙昧の少数種族にも成り立つし、個別言語については知能未熟の五、六歳児も自由に且つ無数に言語を話す事実によって、言語の意味の表現方式である文法は、耳で聞き目で見て誰でもすぐに理解体得できる程度に簡単明快であり而も‘有限’僅少であると予断できる。

若し哲学のように思惟したり、論理学のように推理しなければならぬものなら、知能未熟者が体得できる筈はない。

言語の意味を表現するのに、既成の単語をどのように配列するか、その配置の仕方が文法なのだから、文法論は音韻論や造語論とは截然別個の範疇である。

‘本をよむ’ という意味を表わすには必ず ‘本をよむ’ という、言わねばならない、幼稚園児も大学教授も80才の老婆も。もし ‘よむ本を’ と言えども通じない、文法に合わないからである。そうすると ‘本をよむ’ という排詞がそのまま文法である。‘よむ本を’ が文義不通であるとは、文法に合わないということであり、排詞が文法に合わないと言語にならないということである。すると排詞が文法に合えば意味が通じて言語が成りたち、文法に合わねば文義不通で言語にならない。換言すれば、文法は言語の成立を支えるものであり、文法を無視しては言語は成立しない。然らば ‘本をよむ’ とはどのような文法であるか、それを今度は究明しなければならない。

「言語の正体というものは、容易に掴みえないものである…限界のはっきりしない、茫漠とした対象を捉えて、これを観察分析するということは、どういふことになるのか、その方法はどのようにしたならばよいのか」という時枝誠記氏（『講座日本語文法』3—1頁）に、僕は次のように答える：

‘本をよむ’ という文法は、‘本を’ という賓語（客語—目的語）の次に ‘よむ’ という他動詞を置く、いわゆる ‘賓動結構’ という文法である。この方式に、いま別の単語を代入してみると：

賓語		他動詞	賓語		他動詞
名詞	賓格助詞		名詞	賓助	
本	を	よむ	算教	を	勉強する（教える）
手紙	を	かく	ボール	を	なげる
ご飯	を	たべる	塾	へ	通う
田畑	を	耕やす	学校	へ	行く
家	を	建てる	欧米	へ	出張する

車	を	運転する	ホテルに	泊る	} 賓語が 人と事 物と 2 つ
橋	を	渡る	富士山に	登る	
田舎	に	住む	○銀行	から	
東京	から	かえる	金	を 借りる	
○パリ	へ		○彼	に	
行きたいと	思う（言う		借金を	かえす	

というように相当語集のある限り、無数に同型句を増殖できる。こういう性能を文法の生成性 *generative* という。生成性は文法固有の性能であり、生成性でないものは文法というに値しない（チョムスキーと異なる）。文法は生成性なるが故に有限僅少の *rules* で無限の表現に耐えるのである。

2 主語と述語一句 *sentence*

凡そ言語は突然又は偶然に空間に発生するものではない。必らず何かについてか、誰かに向って発せられる。その‘何か’‘誰か’を主語といい、主語について述べられる言語を述語という。→主語・述語の定義。

すると主語と述語がそろって意味がまとまることになる。

形態上主語と述語が具備し } そういう言語単位を句 *sentence* という
意味が貫通完結する

僕は所与の言語については、必らず形態上主語と述語がそろっているか否かを見ると同時に、必らず意義がよく通りよくまとまっているか否かを問う。句義がよくまとまっていれば主語と述語がそろっている証拠であり、主語と述語が具備すれば句義が完通する筈である。言語の意味の表达方式が文法なのだから、意味を離れては文法は存在しない。この点で「文法は自律的なもので意味とは別もの」という N. Chomsky とは根本的に相異なる。

このように規定された句一形態と意義が対応する言語単位一を文法の基準に立て、あらゆる文法は句の構造形態の裡に於て定まる、とするのだから、従来の意義論乃至構造論と区別して、僕はその文法を形義論と呼ぶのである。

3 句の構成成分→主要成分と付加成分

一つの句は通例 obligatory の主要語と、 optional の付加語との2成分から構成される。

一つの独立句が成り立つために必須不可欠 obligatory の詞語、換言すればそれを欠いては句が成り立たないような詞語を主要成分といい、それ以外はすべて付加成分である。

付加語は主要語の意味を複雑多様に潤色するが、その有無多少は句が成立するか否かには全く関与せず、言うなれば有っても無くてもいい加否自在 optional の詞語だから付加成分という。

句の構成成分を主要語 obligatory と付加語 optional に分け、主要語だけの配合形態によって句の類型を抽出帰納し、付加語は別のレベルで考究するという方法は、形義論が独自に開発したものであり、この点で従来のあらゆる文法論と根本的に相異なる。

チョムスキーの変形文法はNPとVPとの結合をS・句と規定しているが、これは obligatory（主要）と optional（付加）を分けないから、主要語だけの構造形態による基本文型（句型）を類別することが出来ず、窮余の極、変形文法という邪道に迷いこんだのではなからうか。

4 主要語と基本構造（句型）

主要語→主語と述語→の配合形態によって句の表現形態→句型が定まるのであるが、主語は一般に名詞、人称詞、指示詞、名詞語句などで紛れないから暫く措き、述語だけについて見ると、あらゆる独立句の述語は、必らず形容詞、又は動詞、又は動詞と賓語に、よって表現される：

- 1) 形容詞はそのまま述語となる。形容詞述語は動詞述語と区別して表語という→主表句。動詞には系詞動詞、自動詞、他動詞の3種があり
- 2) 自動詞は一般に賓語をとらない→主動句
- 3) 他動詞は一般に賓語を伴う→賓動句

4) 系詞動詞は必ず主語を伴う→主系句

5) 述語は動詞形だが、主語が‘場処’という特殊な難解な表現がある→処動句。ほかに

6) 受身構造と 7) 使役構造。

以上7形は述語が一つの表現形だが、外に述語が二つ以上のいわゆる複述表現が2形ある。

8) 通述構造と9)連述構造。

単句の表現類型は以上9型と思われるが、基本文型は日本文法の根幹だから、例文を挙げてその構造形態を確認しておかねばならない。

（Ⅱは主語と述語を分け、Ⅰは述語の中で主語と動詞を分ける。）

5 基本構造

1) 主表構造 形容詞述語を表語という

主語 述語（読む時は符号は一切無視する）

① 花はⅡ美しい

② 象はⅡ鼻が：長い（句中の部分に於ける小主語：）

③ 長岡はⅡ雪が：多い（言3—29）大修館「言語」50年3月号

②③は述語が主表句。鼻は象の部分、雪は長岡の属性。単に「鼻が長い」「雪が多い」と言っても、意味不完全で何人も納得できない、必ず「誰の？」「どこが？」という反問が起きる。そこで主語を補って「象は鼻が長い」「長岡は雪が多い」というと、始めて意味がまとまる独立句になる。→句義がまとまるか否かを問う、ということが形義論独自の方法。

因てあるモノの部分や属性を主語（小主）とする句は独立句にはなり得ず、小主の属するより大きなモノを主語とする句の述語にしかなり得ないという文法が導かれる。次頁2の⑦…彼が：折った（何を？）⑧…腹が：立つ（誰が？）も同断。

2) 主動構造 主語と自動詞の配合

動詞は、死ぬ、殺す、のように自動か他動のはっきりするものもあるが、両

動する動詞が非常に多い。しかし自他の区別はすぐできる。

(a) **自動詞**：主語と配合しただけで、賓語なくとも意味のまとまるものは自動詞、例如：…

○親は死んだ ○子が生まれる、立つ、坐る、寝る、歩く…○海がある…

○娘は笑う、泣く、ころぶ、よろめく… など

但し賓語を伴った時は他動詞に活用したものと看做す、例如：○猫が子を生む ○たたみに坐る ○道を歩く ○彼は僕を笑った…

使動詞を設けると煩雑になるから他動詞と看做す→○人の畑をあらす ○娘を笑わす…

(b) **他動詞**：必らず賓語を伴う、賓語を伴わぬと意味のまとまらぬものはすべて他動詞とする→○彼は殺した、 だけでは意味不完全、 必らず「…犬を殺した」というように賓語が必要。

主語 述語
④ 太郎は || 立つ (坐る、歩く、…勉強する、遊ぶ)

⑤ 屋根は || 丈夫にゝ作って+ある

ゝの前は副詞・副詞語又は連用語、+の後は助動詞。

⑥ 家は || やけ+なかった (言3-21)

⑦ 花は || 彼が：折った+にちがいない (同一5) 述語が主動句

⑧ 太郎は || 腹が：たった (同一24) … た+った

⑨ 雨が：ふればゝ僕は || 行か+ない

+符以下は助動詞、それにつづくために主要動詞‘行く’が‘ゆか’と語尾変化するのを‘活用’という。活用は動詞、形容詞、助動詞に起きる、併わせて用言という。活用には定まりがある、が小学生もそのきまりを誤ることは殆んどない。

3) **賓動構造** 述語が賓語と他動詞の配合

死ぬ、殺す、のように自他動のはっきりするものもあるが、両動する動詞が多い。賓語を伴うものを他動詞とすればはっきりする。

主語 述語
⑩ 私は || 本を | よむ …述語は賓語と他動詞

主語 述語

- 5) 処動構造 述語は主動形又は賓動形だが、主語が場処（時間のこともある）という特殊な文型。中外の文法家でこの文型を立てたものが無いようだが、これを建てないと文型は永久に完備されないだろう。

- ‘鼻が長い’ だけでは意味が不完全で句にならないのは ‘象’ という主語を欠くからであると同様、‘梅の木がある’ だけでは意味が不完全で句にならない、必ず ‘何処に’ という場処詞を主語として冠しなければならない。

- 117 —

- 天候表現は 話者の 現在する 場処についていっているに定っていて 自明だから、指定する必要のない限り省略するのが通例である：

6) 受身構造 助動詞一らる、られる、せられる、させられる—によって表現される。常に必ず主語が受動者である。

- ③⑦ 僕は 車 で 彼 を ・ 家 まで | 送 っ て + や る 双 賓

8) 述述構造 兼語を軸にして前後2述語が通語する。〔 〕は兼語だが実際には文面には現われない

- 118 —

9) 連述構造 同一主語の下に前掲 1～8 の述語が二つ以上並列するもので解り易い。

⑩ 皆さんも＝もうご存じのことと思いますが、
Aさんが博士になりました（国研Ⅱ248）

以上 9 型が日本語の単句表現類型の全部でないかと思う。類型は僅か 9 つだが「無限多」の言語表現に耐えるのは文型はみな generative 生成性だからに外ならない。

別に単句の複合体である複句が6形あるが、既に単句の構造形態が究明されたのだから、複句の文法は単句と単句とのつながり方一連接方式一にだけ残される。そのつながり方により複句は次の6型に分けられる。

6 複句

○空は高く、海は清い（「講座日本語の文法」2-180）

④① 雨も止み、風も止んだ

④② 雨が止め／ば、我々はⅡ出発する(同2-188) ば、副助詞

- 東京はⅡ名古屋の東にⅠある①（賓動句）
 名古屋はⅡ京都の東にⅠある②（同上）

}…東Ⅰにある。も可

故に／東京はⅡ京都の東にⅠにある③（言3—17）…故に／ 接続詞

①②③はそれぞれ独立の賓動句で、もともと何等の連系もないのだが、いま‘故に’という連詞（接続詞）が挿入されると、3句の独立性は失われ、連系して新しい一つの意味のまとまりとなるから、3句を併わせて一つの連詞複句という。

ここで注意したいことは、文法は論理学ではない、或いは論理学とは無縁であるということ。→①②③の順序と句義が合理的の可否かは問わない。

‘枯木に花がさく’という句については、文法論はそれが‘処動構造’という表現形態であり、‘枯木に花がさく’という意味を表わしているというに止まる。枯木に花がさく、という道理があるが、そういう事実があるか、有り得るか、などは一切問わない、問うべきでない。論理学や哲学を導入することは文法論を歪めるという意味で有害である。三四歳児は理屈なしに言語を話す。

(3) 承前句 後句が前句、又はその一部を承ける

○京都にはⅡ名所旧跡が：たくさんある（処動句）これはⅡそれを書いた本でⅠある。（賓系句）‘これ’は前句の名所旧跡をうける

(4) 並列句 同類の主語又は述語を並列又は重複する

○雨がふる、風が吹く、とても外へは出られない。（「口語文法講座」1—116）
 第3句は無主の動賓句で、前2句とは因果関係

(5) 問答句 問句と答句は当然併わせて複句。

○君はⅡどこへⅠ行きますか。〔僕はⅡ〕学校へ行きます

(6) 因果句 前因後果の順に句が配列する

○大雪が降った、新聞はまだ届かない

大雪がふった、ために新聞がこない、と解釈されるから、因果複句が成り立つ。しかしここには連詞も重複も並列もなく、形態の上ではこの2句を連系する客観的標識が何もない。だからただ二つの独立句が並んでいる一つの文であるといっても、それを否認する理由が見付からない。これが句の限界である。これが句と文の境界である。

7 無主句と背景

凡そ句は主語と述語の配合によって構成されるものだから理論上主語の無い句はあり得ないのだが、自然言語の実際面では主語の無い句、甚だしきは更に述語の不完全なものが無数に現われる。例えば：〔 〕の中には省略された部分で実際には文面に現われない。）

(a)問：〔君は Ⅱ〕 どこへ Ⅰ 行く〔の〕…主語を欠く賓動句

(b)答：〔僕は Ⅱ〕 学校〔へ Ⅰ 行くのだ〕…主語と動詞が省略された賓動句

この二つの無主句が完全句の意味を表わすことができるのは、対話又は問答という背景によるのである。若しこの背景から切り離せば、(b)はただ一つの名詞、(a)は疑問か平叙かの区別もできないから一つの述語にもなり得ない。(a)(b)を無主句という。形義論文法には‘一語文’などというものは存在しない。

不完全句は主語が略されるものが圧倒的に多いが(b)のように述語のうち、賓語又は動詞が省略されるものも少なくない。主語、賓語、動詞は主要語であるから、主要語が完全にそろっていないという意味で、述語の不完全な句も合わせて一様に‘無主句’と呼び、無主句の成立を可能にする前後文又は‘場’を背景という。いま問答は場であり、(a)は(b)の前文であり、(b)は(a)の後文である。

無主句は極く少数の挨拶語（こんにちは。バイバイ。ありがとう。いらっしやい。…の類）を除いては、対話体、命令句、天候表現に最もよく現われるほか、格言、俚諺、揭示、スローガン、成語、新聞雑誌の見出し、の類は主語を省略するのが通例である。これらは主語がないのではなく、泛称ゆえに特定の主語を提示し難い、その必要がない、自明である、などによってたまたま略されているのであるということを銘記すべきである。

無主句は完全句に復原せぬとその構造形態一文法―は解らないが、背景を見、句義がまとまるか否を問えば、省略部は誰にもすぐわかる筈。

ところがあまりにも多い無主句に慣れて、それが完全な言語であると錯覚しているのであろうか、曾て無主句文法を講じた文法書がない。これでは文法は到底正確に把握できないのではないか。

○三上「象は鼻が…」30頁： ㊶保証人は引受けない方針だ

○松村「文法辞典」319頁 ⑥二階は人に貸した

○時枝「…口語篇」222頁： ⑦日曜は家です

この3句を僕は発語者（自称—私）又は話題の人（他称—彼）の主語が略された無主句と認定するのだが、三氏はこのままで、完全句と錯覚しているらしい。その文法解釈を誤るのは自然の成り行きと言わざるを得ない。

○〔私はⅡ〕 保証人は引受けない⇨方針Ⅰだ（である）…賓系句

○〔私はⅡ〕 二階は・人にⅠ貸した…双賓の賓動句

保証人、は動詞‘引受ける’の賓語（目的語）、二階は動詞‘貸す’の賓語、だから通常なら‘保証人を引受ける’‘二階を貸す’とすべきだが、いま〔他の事なら兎も角〕保証人は、〔一階でも三階でもない〕二階は、と賓語を特指強調するために賓格助詞をはに替えたものである。因て⑥⑦のはは主格助詞ではなく、特指強調の賓格助詞である、と論定するのである。

○〔私はⅡ〕 日曜は家です（在宅する）…主動句

‘日曜’、は名詞だが、いま句中で表時副詞（連用語）となるためにはを添付したもので、やはり〔週日ではなく〕日曜はと特指の意味をも含んでいる。主語、賓語は主要語だから格助詞というが、副詞又は連用語は付加語だから、このはは格助と区別して仮に副助詞という。

これによって無主句文法が必須不可欠のものであることが理解されるだろう。無主句文法を究明することなくしては、一つの助詞‘は’が、主助か賓助か、それとも副助詞か、さえも論定することが出来なくなってしまう。序に3句の〔私はⅡ〕の‘は’は主格助詞である。

形義論は、主語のほかに‘主題’などは設けない。それから‘深層’や‘基底’を問うのは変形文法である。構造形態を変形したのは原有の文法は永久に解明できない筈だから、変形文法の方法もまた厳しく排撃せざるを得ない。

8 自然言語と付加成分

基本構造は主語と述語即ち主要語の配置方式だけによる分類だが、自然言語は主要語だけの配合で現われることは極く少なく、他にいろいろの詞語が付加

されるのが通例である。それを付加成分又は付加語という。

Λの前は連体語、>の前は連用語、+の後は助動詞、みな累加併用できる

(a) 僕は Λ 彼から借りた Λ 本を Λ 一週間で > やっと >

連体語 連用語 連用語

読み+おわった
助動詞

この句で主要語は (b) “僕は Λ 本を Λ よむ” — 基本構造（賓動）であり、其他の連体語Λ、連用語>、+助動詞、はみな付加語である。

主要語はこの賓動句が成立するために必須不可欠 obligatory の成分であるから、どの一語を欠いても、意味が不完全となり(a)句は成り立たない：

×僕は Λ …その本を Λ …やっと [] 終った

×僕は Λ …借りた [を] Λ 一週間でよみ終った

この実験でわかるように、付加語は句の形態を繁長に意味を複雑にする成分だが、句の成立には有っても無くてもいい加否自在 optional な詞語である。又それだけでは述語になり得ない。

(c) 僕は Λ 一冊のΛ英語のΛ本を Λ 読ん+だ

(d) 僕は Λ 一日がかりで> やっと> その本を Λ 読み+おわ+った

このように付加語はそれを付加する限り句を繁長複雑にするが、基本構造を変えるものではなく、それを消去すれば、それだけ形態が短少に、意味が簡単になり、全部を削れば、最終的には主要語だけの構造—僕は本をよむ—に戻る。付加語のこういう性質を recursiveness 循環性とか還元性という。S-Y Wang（王士元）は環発性と訳す。

だから形義論は、付加語の有無多少にかかわらず(a)(c)(d)も(b)と同様、等しく賓動構造と認定する。

9 付加成分（付加語）

付加語は主要語に付加されて、句の形態を繁長に意味を複雑に潤色するが、それだけでは主要語—主語にも、述語にもならない、なり得ない。

名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞…などというのは単語としての品詞名。

主語、述語、連体語、連用語、補語…などというのは、句を構成する部分（成分）に名づけた呼び名。こういう呼び名を定めないと、句の構造を明確に分析説明できない。

1) 助動詞 主要用言（動詞、形容詞）につづく動詞、助動詞、他の詞語はすべて助動詞という。否定詞も丁寧語も助動詞である。（＋符の前が主要用言、後が助動詞）

記述体 行く（動詞終止形） 行か＋ない（否定助動詞）

対話体 行き＋ます 行き＋ません（丁寧助動詞）

行く、という動詞が否定の助動詞‘ない’、丁寧助動詞‘です’、‘ます’、などに接続するために、ゆか、ゆき、と語尾が変化するのを活用という。

ここで日本語には記述体と対話体と二つの文体があることを一応明確にしておかねばならない。

記述体は、ものを書くときに用いる文体で、著述、論文、レポート、試験の答案、小説、随筆、公文書、法律や各種規定の条文、それから新聞雑誌など、手紙を除く、あらゆる書きものに用いる。

対話体は、人と話をする時に用いるもので、いわゆる丁寧語がこれに当る。一般に、です、ます（あります、ございます）一類の丁寧助動詞で述語を終結するから記述体より冗長になる。

記述体は対話体を借りて表現しても不都合はないが、人との対話、手紙には一般に記述体は用いない。

外国人に、日本語はむづかしいと思わせる最大の理由は、この二つの文体を日本人が無造作に混用するからでないだろうか。注意しなければならない。

助動詞は(1)種類が割と多い、(2)その否定形があり、(3)更に丁寧語があり、(4)それらの助動詞は累加できる、からやや煩雑となる。

助動詞は付加語だから単独では述語になり得ない、例如：

○僕はⅡ行き＋たくないと思わないわけではなかったのである。（のであります、のでございます）‘行く’は助動詞につづくために‘行き’と活用。

この句で、主要動詞‘行く’を削り、助動詞だけにすると

×僕は 〓 たくないと思わない……のである。 となり 文義不通で 句にならない。
い。一助動詞はどんなに長くとも単独では述語にならない。

国立国語研究所の「話しことばの文型」は主として助動詞の種類に応じて文型を百種以上に類別しているようだが、形義論は主要語の配合によって基本構造を建てるので、‘国研’とは分類の基準を全く異にする。

2) 連体語（連体修飾語・定語） 体言、〓の前

(a)その典型は形容詞 美しい〓花 高い〓山

形容動詞 静かな〓海 愚かな〓人

(b)動詞の連体形 はたらく〓人 使用する〓道具

(c)名詞は接続詞 ‘の’ を介す 〓木の〓葉 〓あの犬 僕の〓家 隣の家の
茶の間の棚の上の〓テレビ 鐘の鳴る〓丘 橋のない〓川 僕が生れた〓田
舎の〓家

(d)其他の詞語 漱石の書いた‘行人’という〓小説

3) 連用語（連用修飾語・状語） 述語、〓の前

(a)その典型は副詞 表時副詞はよく句首に置かれる

きのう〓僕は 〓家で〓ゆっくり〓小説を 〓読んでた 副詞は即ち連用語
表時副詞 表処副詞 副詞 （表時副詞はよく句首や主語の前に）

桜は 〓 たいへん〓美しい 木の葉が 〓 はらはら〓落ちる

(b)形容詞連用形 花は 〓 美しく〓咲く

車が 〓 飛ぶ／ように〓速く〓走る

／ように、 は ‘飛ぶ’ という動詞が句中で連用語になるために付加された副助詞。

(c)其他の詞語では副助詞を伴うものが多い 〓木片／で〓舟を 〓 作る ‘で’ 副
連用語

助詞 …いま無主句

〓 〔僕は 〓〕 雨がふれ／ば〓行かない }
〓 〔僕は 〓〕 雨がふらなく／とも〓行かない } 〓ば、／とも、副助詞
連用語

○東京／から／大阪／まで／汽車に／乗る…無主句

表処副詞(連用語)

4) 補語 述語の後に現われる連用語を補語という。だから連用語の倒置形として扱ってもいい。ゝ符の後。

○花が／咲いた／美しく

○僕は／行く／雨が降ら／なければ

ほかに次のような助詞がある

5) 格助詞 主要語の主語又は賓語につく

主格助詞と賓格助詞の2種 ○僕は／本を／よむ…‘は’主助 ‘を’賓助

6) 副助詞(後置詞) 付加語につく(前頁連用語の例文参照)

連体語につくものと、連用語(補語)につくものと2種

7) 接続詞(連詞) (前頁連体語の例文—‘の’はその一つ)

名詞をつなぐものと、述語をつなぐものと2種

8) 語気詞 間投詞 感歎詞 疑問詞 終句語気詞 ……

などがあるが、いま举例解説する余裕がない。

助動詞乃至各種助詞まで大約8種が付加語である。付加語は、それだけでは、如何に繁長であっても述語にならない、句を成立する要件にならないということは前掲例文で見た通りである。之に反し主要語は如何に短少であっても句が成立するためにはどの一語をも欠くことのできないものである。とすれば付加語文法を合法に理解するためには、必らず先ず句の構成成分を主要語と付加語に分けることの必要性がここでもまた回顧されねばならない。

現代日本語の文法は、生成性の基本構造9～15型と、還元性の付加成分8種で全部まかなわれるのではないかと思う。換言すれば generative の基本構造と recursiveness の付加語とが縦横に交錯することによって、形態が繁長で意味が複雑な句一言語表現一が‘無限多’に生成されるのである。

因て9～15型と8種とを究明すれば日本語文法は一応全部完了する。これで

文法の範囲が画定し、自然に音韻論、造語論、語彙論、修辞論、文章論との区別が明確になる。

10

いま基本構造と付加成分で40余条の例文を挙げたが、この機会にそこに現われた主格助詞について一言しておきたい。

主格助詞

(1)一般普通の主助

は 独立句の主助はすべて‘は’、但し処動句の主語は場所なので例外があることがあるが。

- ①花は ②家は ④太郎は ⑩私は ⑬吾輩は ⑳会場は ㉓花子は
㉗僕は ㉙私は ㉚東京は …など無数 ㉔庭に(処動句)

(2)特殊強調の主助

が (a)不完全独立句の主格助詞はすべて‘が’、何等かの背景が意識される限り完全の独立句とはいいい難い

- ㉓川野君が… } A君でもB君でもない、又話題の人、川野、山野を特指する
㉔山野君が… }

○梅の花が咲いた、とは桜でも桃でもない、寒さにめげず、まちこがれた、あの梅の花が、と特指する

(b)句中の部分に現われる主助は‘が’（〳符の前が主語、後が述語）

- ②象は 〳鼻が… ⑧長岡は 〳雪が…
⑦花は 〳彼が… ④太郎は 〳腹が…
⑰僕は 〳台風が ⑳昔は 〳京都が…
㉔庭に 〳梅の木が ㉕会場は 〳余興が…
㉗鹿兒島でも 〳雪が ㉙…屋上には 〳望遠鏡が
㉚瓢箪から 〳駒が ㉛東京は 〳勤勉な人が…
㉜皆さんも 〳…Aが… ㉝きのうは 〳大風が…

(c)連用語中に現われる主助は‘が’

⑨雨がふれば…

⑫雨が止めば…

⑭彼が来ないのは（主語句の中）∥ 車が…（賓語句の中）

も 並列関係

⑮皆さんも…

⑯風も∥ 止み、雨も∥…

⑰私にも…

でも いろいろの条件が意識される

⑲鹿児島でも…（南国という背景が意識される）

から 主語は場所又は時間

⑳瓢箪から…

このように等しく主格助詞といっても、は・が・のは・も・でも・から・まで…などいろいろあり、その間にどういう相異があるかは、句の構造の裡にはっきり現われる。換言すれば、どんな頃細な文法も句の構造形態の裡に現われる、或いは構造形態の裡で定まる、のであるから、句の構造類型を漏れなく全部探索抽出することが文法論にとって不可欠の大前提ということになるのではないか。しかし基本構造を全部抽出網羅した文法書をまだ見たことがない。

む す び

1) 形態上主語と述語が具備すると、意味がまとまる、そういう言語単位を句という。

2) あらゆる文法は句の構造形態の裡できまる。

3) 句の構成成分を必須 obligatory の主要語と加否自在 optional の付加語に分ける。

4) 主要語だけの構造形態によって文型を類別すると、日本語の単句の表現文型は全部で9個、外に複句6個、みな生成性 generative。生成性でないものは文法というに値しない。

5) 必らず無主句文法を究明する。

6) 主要語以外の詞語は、すべて付加語、日本語では8種ばかり（二三の出入はあり得る）。加否自在だからみな還元性 recursiveness。

7) 単句 9 型、複句 6 型、合わせて 15 の基本構造と 8 種の付加成分が日本語文法の全部。全部とは、これ以外に文法は無いということ。

生成性の基本構造と還元性の付加語の縦横の交錯により、日本語という言葉の表現は無限多に生成される。

十年前已に漢語文法を体系化した経験から、この理念と方法は、日本語、漢語以外の個別言語にも応用できるのではないかと考えているのだが、果してどうであろう。

1976—9—10

